教員と学生が協働の学びを創り、社会発信する

研究室紹介

孫　　美　幸*

Faculty members and Students create Collaborative Learning and share Research with Society

Key Words：Collaborative Learning

1、はじめに

2016年4月大阪大学大学院人間科学研究科に未来共創センターが設置されました。本センターでは、研究科のオリジナリティあふれる多様な研究活動を、教員自らが社会へ情報発信していくこと、そのような情報発信を通じて、センターが社会との「結節点」となり社会貢献を行うことを目指しています。また、所属する大学院生や学部生が、小・中・高校への出張授業、サイエンスカフェ等、課外活動に参加することで、研究成果の一般社会への還元方法や対話力の向上、及び企画・運営能力などの実践的能力を養うことに重点を置いています。

2、未来共創センターの活動概要

人間科学研究科には多様な専攻（行動学系、社会学・人間学系、教育学系、共生学系）があり、従来から「現場に寄り添う、文理融合的で学際的な研究活動」を展開してきました。本センターの設置を通して、この機能を一層強化することを目指し、研究科内での教員や大学院生の学問交流の機会を下記の通り創ってきました。

人間科学研究科教員を中心にした人間科学セミナー（大学内外の研究者による研究講演を、市民にも開放して実施する）、大学院生と学部生によるランチトーク（昼休みに食事をしながら、大学院生と学部生が研究内容を語り、質問することを気楽に楽しむ）を実施しました。専門分野にだけ通じる言葉を使うのではなく、広く専門外の人にもわかりやすい言葉で自分の研究を語り、質問しあうことを通して、融合的学問領域の開拓や実践的な教育研究活動の実現へとつなげられるように支援してきました。

また、本センターでは、教員や大学院生自らが自身の研究を、社会へ情報発信していくこと、そのような情報発信を通じて社会貢献を行うことを目指してきました。

上記の活動の一環として、人間科学研究科教員、大学院生、学部生との協働で、小・中・高校生に自身の研究テーマを発表したり、進路をどのように選んできたか、中・高校生の頃どのような学習を進めてきたかなど自身のライフストーリーを語ったりする、出張授業（高大連携活動）の機会を創出してきました。

また、市民公開講座は、人間科学研究科教員を中心に、学内外の研究者と市民を結ぶ機会として実施しました。なお、教員からの一方的な講演だけでなく、講演終了後に、講演した教員、スタッフ、学生、市民らとの歓談の場を設け、実践的な交流を目指しました。

そして、コンポジウム（コンサートとシンポジウムを合わせた造語）は、人間科学研究科教員を中心に、大学院生・学部生も補助的に加わり、音楽と講演を通して、研究者と市民の学び合いの場を提供してきました。さらに、サイエンスカフェは、人間科学研究科教員と大学院生・学部生との協働のもと、箕面市国際交流協会とも連携をとり、中・高校生や一般の方々に研究をわかりやすく伝え、語る、対話の場を創ってきました。

* Mihaeng SOHN
1974年11月生
立命館大学大学院社会学研究科修了（2010年）
現在、大阪大学大学院　人間科学研究科附属未来共創センター　講師
博士（社会学）　日・韓の平和教育・多文化共生教育
TEL：06-6879-4050
FAX：06-6879-4050
E-mail：sonmihen@hus.osaka-u.ac.jp

3、中・大連携活動の実践事例～多文化共生教育プログラムを通じた現場生成型研究

私はこれまで、平和教育の視点から日本と韓国における「多文化共生」をテーマにしたプログラムと「いのち（A：自然環境の中でのいのちのつながり、B：自分が受けついできたいのち、C：自分の身体）」という観点とをつなぐための理論的な考察、教育プログラムの開発と実践研究を行ってきました。その中でも、私がコーディネーターとして関わってきた京都市立朱雀中学校での「多文化共生教育プログラム」は、NGOや大学生たちとの協働を大切にして進めてきたものです。

2016年7月センターに着任して以降、センターの中・大連携活動の一つとして、このプログラムへの学生たちの参加を積極的に進めてきました。なお、ここでいう「協働」とは、学校、NGO、大学生たちとの協力体制のことだけでなく、その過程を通した学び合いの意味も含めて使用しています。このように私自身がプログラムのコーディネーターとして内在的に関わってきた研究は、佐藤郡衛が述べる「現場生成型研究」にあてはまります。佐藤によれば、「現場生成型研究」とは、「現場に内在的に参画し問題解決に向けた「願い」「思い」を持ち、解決可能な課題を見いだし共有すること、そして、課題を解決するための努力をすること、最後に「変える」ためのアクションをおこすこと」と説明されています（佐藤郡衛（2012）「臨床という視点からの異文化間教育研究の再考ー「現場生成型」研究を通してー」異文化間教育学会『異文化間教育35』pp.14-31）。

2016年度は、京都市立朱雀中学校1年生を対象に、本格的に2年生で学習が始まる前の導入授業を実施することにしました。この導入授業を、フィリピンにルーツのある学部生1名と私が担当することになりました。当日の授業概要は下記の通りです。

2017年2月10日（金）5·6限　京都市立朱雀中学校1年生（88名）体育館

・5限（13時30分～14時20分）学部生Aさん

→母親の故郷、フィリピンマニラ市の紹介。写真を見せながら、お正月の様子、町の様子、ジプニーという乗り物、食べ物（ハロハロ、ココナッツなど）。

→フィリピンに住んでいる親戚、日本で一緒に暮らす家族の紹介。

→フィリピンと日本をルーツに生きてきた21年間をふりかえる。

日本語ができないまま入学し、小学校の頃いじめの対象となった経験。中学生のとき、母親がつくったお弁当が恥ずかしかった。高校で、いろんなルーツをもつ人たちに出会い、自分のルーツにほこりをもてるようになりたいと思った。大学への編入試験を受けて、現在の専門である人類学を学ぶことにつながった。

・6限（14時30分～15時20分）孫

→多文化に生きる豊かさをテーマに、文化のまざりあいの中で生きること、言語の違いと文化の流れについて地図や言葉から考える、「日本」の中に溶け込む異文化についてクイズで考える、「幸せの石のスープ」という童話を読み文化の普遍性と個別性について考える。

4、教員と学生の協働の下、社学連携を進める

今回授業を創るにあたり、コーディネーターである私と中学校の先生方の打合せは、前年度からスタートしており、授業実施に至るまでとても時間をかけています。中学校の担当教員からは学年全体で抱えている課題や外国にルーツをもつ子どもたちだけでなく、多様なマイノリティの子どもたちの情報も一緒に共有します。その中で、この学年の子どもたちに必要な視点や子どもたちにつけてほしい力等を一緒に考え、NGOや大学のスタッフと適任の講師がいないか、どのような視点を大切にすればよいか議論を重ねます。今回講師を務めてくれた学部生のAさんは、大学のセンター教員から情報があり、自分のルーツについて話す機会があれば積極的に参加したいと言っていることがわかりました。Aさんと私は12月から打合せをし、子どもたちに伝えたい内容を整理しています。2時間の授業を教員と学部生が協働して創るのです。またこの過程は、中学校だけではなく、関わっているNGOにも随時連絡をいれ情報共有しています。つまり、1年間をかけて、大学、中学校、NGO間の社学連携のステップを丁寧にふんできたと言えます。

授業後、中学校の先生から「クラスには様々な国にルーツを持つ子がいます。何人かに話を聞くと、「共感するわー」と感慨深げに感想を述べていました」

「来年度の授業を楽しみにしています」と連絡がきました。学部生のAさんは、引き続き次年度もプログラムに関わりたいことやセンターが主催しているサイエンスカフェ等の活動にも参加したいと意欲を見せてくれました。この話を聞いたNGOのスタッフたちも、次年度どのようなプログラムにしようかと考えだしてくれています。

5、おわりに

未来共創センターでのさまざまな活動を通して、学生たちがいろんな側面を見せてくれるようになりました。出張授業の経験を通して、自分がどうしてこの研究を志すようになったのかふりかえったり、自分とは違う専門の先生方と一緒に授業を創ることで新しい発見をしたりもするようです。また、一般の方に向けたサイエンスカフェのような企画では、研究をやさしい言葉で語ることの難しさを実感したりしています。今後も研究科内の教員や学生が領域を越えて協力しあい、新たな学びの場を創造していく過程を私も一緒に楽しみたいと思っています。